1969.8.7　明治大学新聞

手づくりのガリ新聞

生田

このビラはずい分前のものであるが、うだる暑さとともにそろそろバリケードに慣れっこになってきたこの頃、「初心忘れるべからず」の意味で、ひとつ紹介する。

遂にわれわれは最も苦しい道（はじめがあって終りのない闘争）を選んだ。この苦しい道とは、自らの勉学・学問の日常性を否定し、改めて学問を社会総体において、把え直す作業を意味する。バリケードはどのような意味をもつか。今度の明大闘争は、われわれの考えるところを最もよく外部に伝えるものとして、バリ・ストを採用した。過去一貫して、われわれは現在の大学における学問の不毛性と体制内における学問・研究の幻想性を告発してきた。しかしながら、教授は科学のための科学としてしか自らの学問を位置づけることができなかった。学生の間にあっても、就職のための勉学であり、学問の自律性は全く存在していないことが明確となった。日本国家独占主義の帝国主義再編は大学に対しては、大学を知的産業として位置づけ資本の論理を貫徹しようとして中教審答申、大学立法が出てきている。われわれは自ら学ぶことを放棄し、大学の機能をマヒされることによって、改めて農民・労働者を資本の重圧から解放するための学問を模索しなければならない。学問はそもそも批判を根底としてはじまるものであるが、体制内にあってもそれが可能であるが如き幻想を現在の大学は教えている。その意味で、教授・教授会は体制への奉仕者でしかないし、われわれの敵対者でしかない。われわれは大学を労働者に開放し、労働者・地域住民との相互討論の中から自らの学問・研究の方向性を把握していかねばならない。この作業を保証してくれるものこそバリケードである。（生田地区全共闘「バリケードは語る！」より）

また、ここにガリ版ですった、手作りの新聞がある。一つはその名も「二枚舌」。誰かを皮肉ったらしい。七月十五日（火）付で創刊号である。四ページ建て。一面のトップには「情況を切開く者へ！／農再編再考の一視点」と、いう見出し。「天下堂ビル占拠（十一日）」のニュースあり、これまでの闘争経過あり、さらには「朝日ジャーナル」から転載した「秋田議長の獄中日記」まで掲載している。

もう一つは「黒潮」新聞。これも創刊号で、日付は七月十六日。トップは「7・11団交／逃げの明治本性暴露」と何やらスポーツ新聞めく、そして、これも同じように闘争経過を載せている。

いずれも週刊だそうで、出き上った新聞は田舎へ帰っているクラス員に郵送しているという。散りちりになったクラス員のコミョニケーションにはいい方法である。

（Y）